

東北大学法学部同窓会

## 會報

第6号

発行所

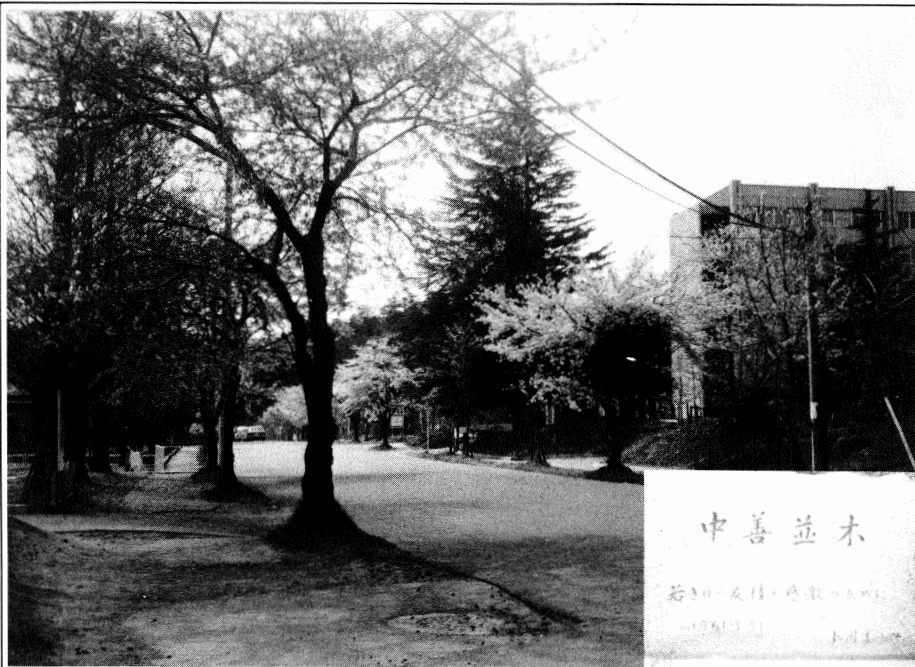
東北大学法学部同窓会

発行日

昭和54年8月1日

印刷所

大日本印刷東北事業部



中善並木 1961,3中善並木“若き日の友情と感激のために”と刻まれた石碑を中心に植の若木が植えられたが構内整理で現在は桜の並木になっている

## 法学部の近況について

会長 幾代 通

この会報の前号(昭和五三年一〇月)を出した以後の人事異動としては、十一月一日付で、租税法の水野忠恒助教授が新たにスタッフに加わりました。これで、法学部の教官の現員は、教授二三名、助教授八名、他に教授(派遣職員)一名(小田滋国際司法裁判所判事)で、このうち、東北大学法学部出身教官は、菅原、樋口、阿部、林屋、小山の各教授、岡本、森田の各助教授、これに本学大学院法学研究科出身の多喜助教授を加えることができます。

本年三月には、二一九名の卒業生が元気に巣立って行きました。就職先は、公務員(公社・公団を含む)八一名、金融関係四七名、その他の民間企業六五名、大学院進学四名、などとなっています。就職に見られる最近数年来的特徴としては、地方公務員に行く人が顕著に増加したことが挙げられます。

本年六月十六日には、柳瀬良幹先生をお迎えして、法学部学生を対象にした学術講演会を開催しました。一番教室にいらっしゃる学生がつかける盛況でした。演題は「行政法の原理と思想」。先生一流のユーモアをまじえ、かつヒネリの効いた話しぶりで、公法の基本的な問題について論じられました。学生諸君には、あるいは少しむつかしかったかなという感もありませんでしたが、それぞれ深い感銘を受けたようでした。

ところで、右の講演会の会場とした一番教室(定員三〇〇名)と、いま一つの二番教室(定員二五〇名)とは、無窓構造で、換気通風装置と冬期の暖房装置とを持っています。冷房の方は、装置を設けるスペースは残してあるのですが、とりあえずは冷房なしで出発したものです。これが、ここ二、三年来、夏期は暑くてかなわないという苦情の声が、学生からも教官からも高まってきました。特に七月前半と九月前半の、いずれも非常勤講師による連講の期間の暑さは、耐えがたい日があります。調査の結果、通風装置に故障のあることがわかって修理しましたが、これだけでは足りません。仙台の土地の気温が一般的に上っているのかもしれない。冷房など抜本的な方策を目下検討中です。新築後数年、あちこち工合の悪いところがわかったり、出て来たりするのも、個人の住宅の場合と同じような感じですよ。と同時に、川内に移ってきて、もう六年になるか、という感慨もあります。

終りに、会報五号発行以後に物故された小町谷操三名誉教授および河村又介元教授の御冥福を心からお祈り申し上げます。

### 小町谷操三先生を偲ぶ

菅原菊志

(二五卒 東北大学教授)

本年一月五日午前一時三十分本学名誉教授小町谷操三先生は、直腸ガンのため聖路加国際病院で逝去された。享年八六歳。



小町谷先生は、明治二六年一月一日長野県の一寒村でお生れになり、幼児の頃北海道に渡られた。小樽中学、旧制二高を経て、大正六年東京帝国大学法科大学を卒業、大学院で商法学を専攻、判事、弁護士、三年間の在外研究(フランス・ドイツなど)の後、大正一三年四月三十一歳の若さで、創設されて間もない東北帝国大学法文学部の教授に任ぜられた。爾来昭和三十一年三月に定年退官されるまで三十二年の長期にわたり、研究と教育に、さらに研究者の指導育成に尽力された。また昭和二十五年には日本学士院会員に列せられた。

先生は、先生の多年に渡る学問的業績はまさに枚挙にいとまのないほど多数に上り、しかもその各々が珠玉ともいふべき力作である。その主な著書だけあげれば、海商法研究全七巻、海商法要義全一二巻、新商事判例集全五巻(一巻は近刊予定)、商法講義全四巻、商行為法論、空中運送法論、イギリス会社法概説、仏訳日本商法などがあつた。そのほかおびただしい数の著書、学術論文、判例研究がある。このように先生の研究業績は誠に輝やかしいものであり、先生の研究によりわが国商法学の研究はいちぢるしい向上をみた。とりわけ海商法の分野は先生の独擅場ともいふべき部門であつて、先生がこの未開の分野に開拓の鋳を入れ、これを豊穡の地となすとともに、わが国海商法学をよく世界的水準に到達せしめた。これはまさに六

〇年以上にわたる先生のためむことの研鑽の賜にほかならない。先生はよく「牛歩」という言葉を口にされ、私たち弟子(窪田宏神戸大教授、本間輝雄大阪市大教授、田辺康平西南学院大学教授、上田宏東北学院大学教授など)をさとされた。亡くなられるまで続けられた先生の厳しい研究生活に接するとき、いつも先生の愛された旧制二高校歌(土井晩翠作)の節を思い出す。花より花に蜜を吸う 蜂のいそしみわが励 不断の渴とめがたき知識の泉掬みとらん 湧立つちしほ青春の 力山をも抜くべきを

### 河村又介先生を偲ぶ

樋口陽一

(三三卒 東北大学教授)



河村又介先生が、ことし一月四日、逝去された。先生は一八九四年(明治二七)年一月一日のご出生だったから、満八十五歳の誕生日をすぎたばかりであられたことになる。

先生は文字通りこの「蜂のいそしみ」を貫かれた。最後に入院されるまで、海商法要義上巻の改訂の意思を捨てられなかった。私たちがとつて無言の教えである。幼少のころ蒲柳の質であつた先生は、健康保持のため規則正しい生活に努められるとともに、スキー、スケート、弓道、テニスなどの運動もよくされていた。とくにスケートはなくなり二年くらい前まで、ほぼ毎日一時間ダンス・スケートインギングを横田喜三郎先生、清宮四郎先生とともに楽しんでおられた。

河村先生は、一九二四(大正一三)年から三二(昭和七)年まで、東北帝国大学法文学部に在職、「国家原論」講座を担当され、かたわら、フランス書講読をも担当された。その後、九州大学教授を経て、戦後、最高裁判所の発足とともに判事に就任、定年で退官されるまで十六年余にわたつて重責を担われた。この間、一九四七年から学士院会員をつとめられた。

先生のお元気な姿はもうみるこゝとができない。しかし定年退官記念講演会で先生が最後に結ばれたお言葉は永久に忘れることなく私の心に残っている。「学生諸君、大きな希望を懐け、功名心に駆られるな。人生の行路は長い。自己のペースを守つて、牛歩の歩みをつけよ。蜂の如くいそしめるな。人生に一寸のすきまもあらしめるな。冬に夏を思ひ、夏に冬の仕度忘れな。運命の女神を逃すな」。

はじめるようになったころは最高裁におられたし、長い間、一度もお目にかかる機会に恵まれなかつた。だが、東大や京大で憲法講座とならんで「国法学」講座がおかれていたのに、本学ではあえて「国家原論」という名前の講座がおかれ、「国法学」の側面だけでなく、イェリネックのいう「国家の社会学論」を含めた総合的な国家学の研究・教育が目ざされていたこと、河村先生がその初代の講座担当者であられたことを学生のころから聞いており、やはり学生のとき、先生の愛弟子・故中井淳博士の遺稿集「デューギ―研究」に寄せられた先生の序文を読んで感銘をうけていたので、わたくしなりの知的、小世界のなかで、先生の存在は、何か身近かなものであつた。むろ

んわたくしの方が一方的にそう思  
つてただけであり、「身近か」な  
どといういい方は非礼にあたるこ  
とはいう迄もないが、わたくし自  
身、実質的には戦前の「国家原論」  
講座をひきつぐような意味のある  
新設の「比較外国憲法」講座を母  
校で担当する立場の人間として、  
先生の講座の後継者にあたること  
にひそかな誇りの気持を抱いてい  
たことに免じて、おゆるし頂ける  
のではないかとおもう。

駅まで奥様ご同道でお迎え下さ  
り、初対面の一若輩に、「目じる  
しに胸のポケットに赤いボールペ  
ンのキャップを挿しているから」  
とあらかじめ先生の方からおつし  
やっていたたくご配慮には、ただ  
恐縮するほかなかった。今日は私  
の「別荘」でご馳走しましょう」  
とおっしゃって、海岸の「ホテル  
・ロングビーチ」にご案内頂いた。  
「私の別荘」とおっしゃるだけあ  
って、先生がいらつしやると窓際  
のお席もきままっているようで、  
ホテル側の歓待もひととおりは  
ない。フォアグラとキャビアの前  
菜にはじまって「ペークド・アラ

スカ」デザートまでの午餐のあい  
いだ、仙台時代の思い出話から最  
高裁時代の面白いエピソードまで  
お話に花が咲き、私も同学の大々  
先輩にはじめてお目にかかるとい  
う緊張をすっかり忘れて、先生の  
お人柄に接したのであった。つゆ  
の晴れ間の大磯海岸は波静かに美  
しく、先生のご温容と重なってま  
ぶたに彷彿とする。海岸の松をバ  
ックに先生ご夫妻と一緒にとらせ  
て頂いた写真をよすがに、ありし  
日の先生を偲び、奥様がお悲しみ  
から立ち直られてご健勝に過され  
ることを祈りつつ、記す。

絡不備のため、振替用紙の紛失等、  
ご応募を見送られている方がまだ  
相当数おありのことと存じます。  
六月末現在の募金実績をご参考  
に供しますのでご協力を頂ければ  
幸いです。なにとぞ母校法学部の  
輝かしい研究助成のため、また後  
輩の勉学激励のため、心暖いご寄  
付を賜りますようお願い申  
上げます。(募金の中間報告実績  
表は五、六頁に掲載)

三、このたび実施中の「法学部学術  
振興基金創設募金」について御協  
力下さった会員の皆様方に深く  
感謝申し上げます。いまだ、納  
めたくとも振替用紙を紛失する  
いは趣意書等を知りたい方は、  
同窓会事務局宛にご連絡下さい。

### 同窓会総会の報告

佐々木 尚 介

昭和五三年度の同窓会総会は、  
東京支部会のご好意で、同支部会  
総会の同じ日同じ会場(十一月二四  
日、新橋第一ホテル)で、開催す  
ることができた。清宮四郎先生、  
柳瀬良幹先生にご臨席いただき、  
幾代・外尾新旧会長(法学部長)  
を含め母校から七人の教官が出席  
された。東京在住の会員のほか、  
仙台、富山、岩手、香川、広島、  
千葉、札幌などの会員を含めて、  
百五十人以上に及ぶ参加者があ  
り、盛会であった。東京支部会と  
合同の進行中の母校学術振興基金  
について、安西基金会長から、力  
強いよびかけがあり、幾代会長の  
感謝をこめた挨拶のあと、外尾前  
会長から、募金状況についての中  
間的報告とともに、同窓会員の献  
身的なご協力に対する御礼の言葉  
がのべられた。議事としては、昭  
和五二年度取次決算の報告が承認  
され、また、新役員の選出がおこ  
なわれた(若干の支部については、

## 東北大学法学部学術振興基金 募金の中間報告と お願いについて

募金会事務局長代理  
小幡 常 夫

暑い日が続いておりますが、同  
窓生各位にはますますご清祥のこ  
とと拝察し、衷心よりお慶び申上  
げます。

額の七五％に達することができま  
した。当初免税措置の認可期限は  
三月末日となっておりましたが、  
今一步のところで締切ることはい  
かにも残念に思いましたし、また

したので、すでに募金に応じて下  
さった同窓生各位並びに法人に対  
しては、四月にその旨の中間報告  
を行い、事情のご了承を求め、最終  
的な募金運動に邁進してきました。  
おかげで七月末現在の募金状況  
は、個人、一、五四五名三、八七  
〇万円(教官三三名分を含む)、  
法人四九社四、六二五万円となり、  
法人の内諾分を含めると合計約九、  
〇〇〇万円に達することができま  
した。これもことえに同窓生各位  
の御協力のたまものと厚く御礼申  
上げます。

しかしながら、目標額にはもう  
少しというところでありますし、  
本募金は同窓生の一人でも多くが  
ご参加下さることに意味がありま  
す。同窓生各位には、日頃のご多  
忙にまぎれ、あるいは事務局の連

終身会員希望の方は終身会費壹  
万円を、又滞納している方が終  
身会員になりたい場合は、終身  
会費壹万円に滞納額を加えた金  
額をお送り下さい。

かねてよりご協力をお願いいた  
してまいりました母校法学部の学  
術振興基金の創設募金につきまし  
ては、多数のご賛同とご縁の深い  
法人各社の格別のご厚意によりま  
して、本年三月末日までに七、八  
五〇万円(内諾分を含む)、目標

一億円の基金の創設は、法学部の  
研究教育体制の整備拡充にとつて  
も極めて緊要な事業であるとの認  
識に立ちまして、募金運動を九月  
まで延長することいたしました。  
幸い免税措置の延長も認められま

したので、すでに募金に応じて下  
さった同窓生各位並びに法人に対  
しては、四月にその旨の中間報告  
を行い、事情のご了承を求め、最終  
的な募金運動に邁進してきました。  
おかげで七月末現在の募金状況  
は、個人、一、五四五名三、八七  
〇万円(教官三三名分を含む)、  
法人四九社四、六二五万円となり、  
法人の内諾分を含めると合計約九、  
〇〇〇万円に達することができま  
した。これもことえに同窓生各位  
の御協力のたまものと厚く御礼申  
上げます。

しかしながら、目標額にはもう  
少しというところでありますし、  
本募金は同窓生の一人でも多くが  
ご参加下さることに意味がありま  
す。同窓生各位には、日頃のご多  
忙にまぎれ、あるいは事務局の連

終身会員希望の方は終身会費壹  
万円を、又滞納している方が終  
身会員になりたい場合は、終身  
会費壹万円に滞納額を加えた金  
額をお送り下さい。

支部からの申出をまつて改選を決定する含みで、了承された。)議事のと東京支部会と合同の懇談会に入り、学術振興基金の成功を期す話題などに話の花が咲き、先輩から若手の卒業生にいたるまで、和気あいあいのうちに会を閉じた。

これまで総会は本部のある仙台でおこなってきたが、地元で在住する会員の数が多くないうえに、全国から参県ねがうのに便利がよいといえず、それにくらべて、今回の東京での総会は、文字どおりの大成功であった。設営準備のために献身的なお世話を頂いた東京支部会のお世話役の方に、心から御礼を申し上げます。

(同窓会事務局長)

# 支部だより

## 東京支部会

小幡 常夫

本年は丁度新制大学満三十年に当り、また昭和四十二年以降は一学年二百三十人と人員が増加しておりますから、同窓生の半数以上が新制の法学士諸君と言うことになりました。又東京圏内在住会員が全国の半数に達する状況にあります。法文学部以来の古い長い伝統にも、何か面目一新の時期が来ているように思われます。さて昨年十一月二十四日、東京支部会の例

会場となつております新橋第一ホテル大宴会場は、大挙上京された本部仙台の役員諸公・同行の諸教授の方々と、久方振りの出会いを喜ぶ格別の交歓気分が溢れておりました。例年出席者の多い東京支部総会と合同で(内容的には、一部・二部を区分)本部総会を持ちたいとの申入れに応じ、初めての合同総会が開催されたのであります。

議事が多くなる関係で、支部会恒例の記念講演会は割愛致しましたが、折柄同窓会としては一大事業と言ふべき「東北大学法学部・学術振興基金」創設のための募金運動展開中でありましたので、安西募金会長のアピール、幾代同窓会長の募金懇請の言葉等がありまして、極めて格調の高い総会でありました。懇親の部は、例によつてテーブルの料理の外に、そば・焼鳥・すしの屋台、乾杯が相次ぐところに実如大勢のバンケットサービスガールが入来して皆さんを仰天させました。これは安西支部会長特別ご寄附に依り、事務局がスペシャルサービスを行ったものであります。余り賑かでしたので、格好の写真も撮れず、ここに発表できないのは残念ですが、ご推察下さい。本年中には募金運動も完了する予定ですが、お蔭様で好成績を収め得る見込みですし、その間会員の住居・勤務先も正確に把握できましたので、支部名簿訂正作業も確度を高めることができま

した。来年は立派なものがお配りできること存じます。年会費納入が順調であれば、無料配布する積りです。

(東京支部会事務局長)

## 宮城支部

佐藤 左織

母校東北大学のお膝元、宮城県における法学部同窓生の数は、多少の動きはあるものの凡そ六百人といわれている。当然のことながら仙台を中心に活躍されている同窓生が多く、法学部の諸先生や事務局との接触に便なこともあり、同窓会の在仙役員としてこれまで種々お世話を続けてきた。

しかし、同窓生の数も次第に増え、特に東京圏においては三千人を越したといわれる昨今、総会等の運営も地元中心の考え方のみでは難しく、また、現在進められている法学部学術振興基金募金事業の推進に関し、全国で十数ヶ所の支部が活発な動きを見せているなどの事情から、支部結成の意向が



持ち上り昨秋設立総会が開催され設立のはこびとなった。

六月に仙台を中心に大きな被害をもたらした宮城県沖地震の跡末も一段落した十月二十三日、東一番丁プラザ一軒に発起人はじめ約六十人が集り、京道信一氏(東北経済研究会専務理事、昭六卒)が議長となり樋口陽一教授(昭三十二卒)の経過説明のあと満場一致で宮城支部の設立が議決された。

続いて会則の審議とこれにもとづく役員が次のとおり選出された。このあと開催された懇親会では新役員の挨拶、幾代同窓会々々長高橋進太郎前宮城県知事(昭三三年卒)、林屋礼二教授(昭三十二年卒)の募金状況報告のあと和やかな雰囲気の中に懇親に入り親睦を深め合った。

- 支部長 佐藤左織(昭八卒)
- 仙台信用金庫顧問・前仙台市収入役 仙台市収入役 高杉能行(昭十九卒)
- 副支部長 北日本電線(株)社長 津軽芳三郎(昭五卒)
- 同 宮城県総務部長 高橋進太郎(前出)
- 顧問 斎藤秀夫(昭八卒)

なお、同日副支部長に選任された菱沼清一氏(藤崎専務取締役、昭十七卒)は就任後間もなく急逝された。ここに謹んでご冥福を祈り上げる次第である。

(宮城支部長)

## 東海支部

高橋 正蔵

東北大学法学部同窓会東海支部昭和五十四年度総会並びに懇親会を去る六月五日午後六時より、名古屋市中村区納屋橋の料亭「鳥久」(三〇年間、本支部の会合場所)において開催した。

出席者は、末尾記載のとおり二〇名で盛会であった昭和三〇年代、四〇年代に比べいささか淋しかったが、年に一度の集りて和気あい／＼裡に楽しい一夕を送った。

記録によると、支部規約を作成し、支部長以下役員を決め、会費を徴収するようになったのは、昭和三十七年からであるが、終戦後昭和二十三、四年頃から、三宅兼松(九卒)、北村利弥(九卒)、安藤武四郎(十二卒)、伊東富士丸(十四卒)、杉田邦保(十五年卒)、高橋正蔵(十七卒)らが中心になり中川善之助先生が名古屋に來られる毎に、その頃名古屋で弁護士登録をされた広浜嘉雄先生も加え、鳥久で集って食事をして来たのが発展して東海支部結成となった。勝本正晃先生、五十嵐豊作先生も出席されたことがありました。

本支部の会員は東北大学法学部同窓会々員及び特別会員にして、愛知・三重・岐阜三県下に在住する者を以て構成しており、一時は百名以上の者が会員名簿に記載さ

(5)

東北大学法学部  
学術振興基金

設立募金中間報告  
個人寄附卒業年次別一覽

事務局長代理  
小幡 常夫

54.6.30現在

卒年次	人員	金額	卒年次	人員	金額
T.15	5	190,000 円	S.31	42	1,020,000円
S.2	14	450,000	"32	60	1,400,000
3	21	670,000	"33	38	945,000
4	11	350,000	"34	39	910,000
5	10	330,000	"35	48	940,000
6	25	812,000	"36	46	1,005,000
7	23	750,000	"37	24	510,000
8	17	570,000	"38	22	441,000
9	26	790,000	"39	22	440,000
10	16	550,000	"40	24	730,000
11	22	780,000	"41	17	299,800
12	34	995,000	"42	21	390,000
13	25	905,000	"43	29	560,000
14	31	905,000	"44	10	160,000
15	38	990,000	"45	8	150,000
16.3	28	860,000	"46	17	171,000
16.12	40	990,000	"47	18	190,000
17	35	1,040,000	"48	18	190,000
18	42	1,010,000	"49	18	190,000
19	45	1,100,000	"50	18	210,000
20	2	80,000	"51	19	204,000
21	33	790,000	"52	16	190,000
22.3	12	320,000	"53	21	221,000
22.9	29	840,000	修士	2	40,000
23.3	33	795,000	元教官	6	580,000
23.9	6	150,000	現教官	33	1,100,000
24	10	410,000			
25	24	630,000	総計	1,517	37,753,800
26	26	650,000			
27	32	910,000			
28	38	845,000			
29	7	200,000			
28新	31	870,000			
29新	50	1,110,000			
30	40	930,000			

## 個人寄附（金種別）一覧

54. 6.30現在

金種別	件数	金額	摘要	金種別	件数	金額	摘要
1,000 <sup>円</sup>	3	3,000 <sup>円</sup>		35,000 <sup>円</sup>	2	70,000 <sup>円</sup>	
2,000	2	4,000		40,000	3	120,000	
3,000	1	3,000		50,000	76	3,800,000	
4,000	1	4,000		70,000	1	70,000	
5,000	4	20,000		100,000	25	2,500,000	
9,800	1	9,800		110,000	1	110,000	
10,000	255	2,550,000		150,000	1	150,000	
15,000	3	45,000		200,000	1	200,000	
20,000	665	13,300,000		300,000	2	600,000	
25,000	3	75,000		現職教官	33	1,100,000	
30,000	434	13,020,000		総計	1,517	37,753,800	

れていましたが、若い会員の異動がはげしく、名簿の整理を怠って来た、め、目下いささか沈滞気味であるので、これを機に、役員一同心を新たにし、本支部の盛んになるよう努力することを約した次第である。(文責17年卒、高橋正蔵)

菅谷知巳(昭和3年卒)  
北村利弥(昭和9年卒)  
中山俊一(昭和9年卒)  
安藤武四郎(昭和12年卒)  
注 孝(昭和12年卒)  
伊東富士丸(昭和14年卒)  
杉田邦保(昭和15年卒)  
高橋正蔵(昭和17年卒)  
八島行康(昭和18年卒)  
小森治雄(昭和19年卒)  
長谷川伴夫(昭和19年卒)  
池田光男(昭和20年卒)  
蟹江良嗣(昭和22年卒)  
鈴木照隆(昭和23年卒)  
相原東孝(昭和25年卒)  
籾進(昭和31年卒)  
向田文生(昭和35年卒)  
水谷厚生(昭和35年卒)  
大島尚之(昭和35年卒)  
松島淳登(昭和38年卒)



## 編集後記

「東海支部だより」原稿がおくられて到着。編集後であったため四頁と六頁に分けて掲載するのやむなきにいたりました。ご了承ください。

